



飛鳥

# かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所  
飛鳥出版室  
発行人 永野 正将  
〒780-0945 高知市本宮町65-6  
電話 088-850-0588  
e-mail: info@asuka-net.jp  
http://www.asuka-net.jp



## 「わが家の太郎」 発行記念特集号！

土佐路は今、新緑のまぶしい爽やかな季節です。  
梅雨入りの前に仕事も家事も片付けて、あつ〜い夏  
に備えます。

「かわら版」、お届けがすっかり遅くなりましたこと  
お詫びいたします。

|                        |        |
|------------------------|--------|
| 「わが家の太郎」特集 .....       | 2      |
| いろいろかいろ 三 .....        | 安藝真一 4 |
| キルギスタンからコンニチハ 69 ..... | 氏原名美 5 |
| 新聞余話④ .....            | 大澤重人 6 |
| おのころじま奮染記 11 .....     | 田島征彦 7 |
| わが家の太郎 40 .....        | 永野雅子 8 |

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

「みんな」の太郎に！

## 発売記念特集！！

びゅーん！



昨年12月21日、『わが家の太郎』は予定から4日遅れで発行されました。発売予定日間近になるとヒタヒタと迫り来るプレッシャー。待つてくれている人がいるのに、このままでは間に合わない！ 急がねば。でも納得いくまでやりたい…に挟まれる葛藤。連載時から応援して下さっている方の期待を裏切らない本になっているだろうか。願わくば、知らない人にも手にとって読んでもらえる本にしたい。

そんな喜びや期待や不安を抱えて、皆さまの元へお届けする運びとなりました。遅れちゃったのも、マイペースな太郎らしい…ではないか…というのは出来上がったから言えるコトバであります。「ぜひ本にしてほしい」と後押しして下さい下さった方々のおかげで、改めて本づくりの楽しさと難しさを味わうことができました。

多くの皆さまからの嬉しいお便り、お言葉を頂戴しましたので、お礼の気持ちを込めまして掲載いたします。(掲載内容は原文を一部修正しています)

▼毎回お送り下さるかわら版では、何回か拝読していましたが、こうして一冊に纏められますと立派な愛犬物語だと思いました。太郎君の日頃の様子、飼い主との係わり、そして折々の季節感などもよく分かります。読み進みますと、ほのぼのとゆったりの気分になりました。早朝に街中を走っていると、犬を連れて散歩する人をよく見かけます。色々な種類の犬、一人三匹ほど連れてくる人もいれば、犬と話しながら歩いてい

る人もいます。『わが家の太郎』を読むと、本当に太郎君はかけがえのない家族の一員だと思えますし、幸せな犬だなーと思いました。併せて、文章はこのような読みやすく分かりやすく、それでいて深みのある書き方をするものだと勉強させて頂きました。有難うございました。どうぞ太郎君と共に楽しくお過ごし下さい。ご多幸をお祈りします。

(高知市・T様より)

▼『わが家の太郎』ありがとう。すぐ読みました。凄く楽しかった。永野くんのこととも想い、読みごたえのある見事な文章です。エッセイストの誕生です。小説家にも。熟年の今はたきに期待します。うらやましい。ぼくも今！ のら犬の絵本を創っています。風邪に気をつけて！ ありがとう。

(兵庫県・T様より)

▼初めて内容を読ませて頂いた時から、一瞬で太郎のファンになりました。雅子さんと太郎のやり取り



# 「わが家」の太郎が 『わが家の太郎』

全国にひろがる太郎ファンから  
反響がぞくぞく寄せられています！



にたくさんの愛情を感じいやされたことです。そんな素敵な本に少しでも携わることができて光栄です。たくさんの方々に手に取ってもらえますよう願っています。

(高知市・A様より)

▼かわいい、かわいい『わが家の太郎』君の本、お送りいただきましたましてありがとうございます。とても

穏やかで温かい気持ちになりました。また、会社をあげて制作、印刷までされているという事で、すごいなと感服いたしました。(愛知県・K様より)

▼「わが家の太郎」ととても読み易くて、あつという間に読み終わったんですよ。やんちゃの太郎くんが悪戦苦闘しながら、日常の生活がさりげなく書かれている中に、永野家の幸福感が伝わってきます。

・お母さんの「太郎よくわかりました。私は独り身ではなかったのです」この文、とても良いですね！

・「ひもじい」、「息子の返信」その通り等一人で爆笑したり、同感したりで、ほのぼのした気持ちです。

「写真編」は、太郎くん赤ちゃんの時は小さくて可愛い。最後の頁の太郎くんの顔アップをじっと見ていたら、お父さんを想っている様な憂いがあった胸が熱くなりました。



A判変形 148頁 定価 1,200+税

お求めは

金高堂書店各店、宮脇書店（高須店、イオンモール高知店）高知市近郊のTSUTAYA書店各店へ。

直接郵送をご希望の方は、当社書籍担当までお問い合わせください。

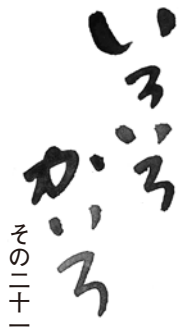
インターネットでもお求め頂けます。

太郎のご主人様の事、セコンダリーグライダのお話は、スタジオジブリの映画と重なりました。1冊の本で映画ができそうです！

(大阪府・N様より)



ごーり  
ごーり



# うつろい

安藝眞一

歳を取ると、「月日の流れが速くなる」という。速く感じるとい  
うが正解であろうか。高齢者の後  
期に入った自分にしても、成程と  
は思う。速度をあげて過ぎ去った  
月日を思い返すと、その中にはそ  
れなりの事柄が詰め込まれていて、  
その分量のせいで速度が早められ  
たとも思えない事がある。むしろ  
分量が多い分だけ、ゆっくりと時  
が流れていたのに違いのないのだと  
思えることがある。

昨今、全くの国民的行事とも  
なったクリスマス・イヴ。二ヶ月  
程も前から念入りに飾り立てられ  
たクリスマス・イルミネーション。  
しかも全国規模で、どの都市も洩

れなく飾り立てた話題が集積する  
ことが伝わる。時、たつていいよ  
よクリスマス・イヴの当日が来る。  
待ったなしで後がない日。イヴの  
昼下りの車の列。どの車のドライ  
バーにもイヴの思いがあふれてい  
る。「夕方まで、夜まで何事もな  
く走り終えられます様に」、あれ  
も買う、これも買った、ぬかりは  
ないか、どうか。何しろイヴ本番  
だからの思いがアクセルにかか  
る。速く走つてもイヴ、渋滞で焦  
ら立つてもイヴ。思いは重く流れ  
はままならぬ。時が過ぎる。大量  
の車列が波のようにゆっくりと浮  
き、じつとりと沈む。その繰り返し。  
夕刻から夜にかかると車の波  
は背のびするように歩を進めて、  
浮き足になるかに見える。暗くな  
ると何しろイヴ。間に合うのか間  
に合わないのか焦りの尾灯が点滅  
する。夜が深くなる。揚句の果て  
日が移るとイルミネーションが消

えて、十二月二十五日。息せき切つ  
て登ったクリスマス。残る六日ば  
かりで正月という日本の歳時記が  
慌しく年の底に降りていく。つ  
づいて迎春の準備。クリスマスと  
は一味違う約束事と飾りつけの手  
順。中に日曜市でも入ろうものな  
らしめ飾り、餅、花、おせちの材  
料と胸ふくれる段取りが沸き上り  
日数も数えられない慌しさのうち  
に、二十九、三十、三十一と大晦日  
を迎えて静まり返る。

明けて正月。晴れ。音がな  
い。針が落ちても聴こえそうな静かさ  
が家の中に満ちている。昨日まで  
の歳末の慌しさがサラリと一刷け  
掃き捨てられて消えた虚脱感が静  
かな空に立ち昇つてどこまでも続  
いている。ゆっくりと時が流れて  
やがて元日の夜が幕を開ける。元  
日二日も事もなく過ぎて、松の内  
に初詣を済ますと、そろりと「日  
常」がよみがえって来る。正月の

気分が途切れないように身動きも  
そろりと静かな明け暮れが続くう  
ちに、七日の声を聴くとハハリと  
動きが加速されて急ぎ七草を走り  
求めて冷水で洗う、米をとぐ。土  
鍋に米をはり、待つ程もなく炊き  
上った七分粥に、塩、七草をまぜ  
入れて碗盛りにして戴く。正月の  
終りである。

高齢者の後期に入ると想い出が  
かなり遠い昔の事柄にからみ付く。  
今日昨日の事よりも、五十年前の  
春の事、さかのぼって七十年前の  
夏の事が鮮明に浮かんで来る。そ  
の出来事までの長い距離、時計で  
は計り知れず、時は停止する。停つ  
たまの七十年に、動きのない  
五十年前の事がうつろい重なり時  
は速く走るどころでなく、ゆっく  
りと立ち止まり静かに流れていく  
のである。







## 年のはじめの憂鬱

氏 原 名 美

うじはら・なみ

高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギス在。国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

母は五十六で勤めを辞めた。定年まで待っていたらやりたいこともやれなくなる、というのが早期退職の理由らしかった。私は、あと四年勤めてからで遅くはないだろうに、と当時は思ったものだが、年が明け数え年六十四になってみるとよくわかる。確かに、もう新しいことを始めるには遅すぎる。母の決断は正解だった。

キルギスには今も昔も定年というものがない。年金受給年齢に達したら退職するというのがソビエト時代の習慣だった。悠々自適の年金生活に入るのが労働者の夢で、暮らしては年金収入で十分成り立つたから、年金をもらうようになつたらどんどん辞めていった。職場に年配者が溢れている今とは大違いだ。学校を終えた若者の就職先は行政府や機関によって決められるのが普通で、選り好みしなければ就活の苦労もなかった。

今は年金受給資格に達しても辞める者はいない。給与所得があつても年金は満額支給されるので、年金の額だけ暮らしが楽になるからだ。大学教員も同じで、健康であれば七十になつても八十になつても教壇に立ち続けている。しかし、私にはそんなに長くご奉公できる自信はない。早くお役御免になりたいと思っている。

年のはじめ、新しい手帳に大きな予定を書き込んでいく。新しい取り組みの時期と担当者、年を越してしまった仕事の仕上げについて計画を立てる。会議用の配

布資料も作っておく。計画といつても、ほとんどが毎年繰り返してきたことの延長で、仕事の内容が大きく変わるわけではない。

職場でも仕事始めは打ち合わせ会議からスタートする。全く新しい事業計画の場合、「また一から面倒な手続きが」と億劫がる私を尻目に、同僚の若い教師たちは元氣なアイデアをどんどん出してくる。彼らの話を聞いていて、頼もしく思うと同時に羨ましくも思えてくる。やはり、そろそろ潮時なのだ。今年の手帳には「引退計画」も記そうと考えた。

ところが、幕引きを考えているうちに、だんだん気が重くなった。辞めるまでの計画より辞めてからを考えるのがずっと難しい。担当を外れるには「後はよろしく」と言えば、どうにかなる。健康不安を口実にもできる。老兵が去つても、人が変わるだけで仕事が消えてなくなるわけではないから、心配には及ばない。残ったものはかえって活躍しやすいかなるだろう。去ることはたやすい。しかし、辞めた後のその先が全く見えないの

だ。

サラリーマンが性に合わなかった父は人に使われるでも使うでもなく好きな仕事を続けて現役のまま逝った。「従軍看護婦になつて兵隊さんを助けたいと思っていた小学生が平和な時代になつてもやっぱり看護の道を選んだわけ」と笑って話してくれた叔母は、定年後に始めたボランティア活動を亡くなる前日まで続けていた。

母は早々と宮仕えから足を洗つたが、社会活動という意味での仕事を長く続けた。新年の挨拶に「四捨五入で九十になりましたね」と書き送ったら喜んでくれたが、そんな歳になつても「毎日することがあり過ぎて時間が無い」と言い続けている。

人は、立ち止まらないで歩いていけば、やりがいのある仕事に出会えるものらしい。できることを続けていけばいい。そう思うと、気持ちも少し明るくなった。

(2017年1月)

キルギス日本語チャンネル

— Kyrgyz Nihongo Channel —  
https://www.youtube.com/channel/UC6ay1J-365gQ8TFMxd1Sua





# おのころじま 大奮木記

ふんせんき

田島征彦

## 11. オスプレイ墜落

「とんとんみーときじむなー」(一九八七)  
「てっぽうをもったキジムナー」(一九九六)  
ぼくは沖縄を舞台にした二冊の絵本を出している。三冊目の絵本は、現在の沖縄で生活している子どもたちを通して日本の中の沖縄を描くつもりだ。二〇一五年から取材に入った。今回は、昨年に佐喜真美術館で出遇った兼城淳子さん(71)の案内でヤンバルの山を見て、オス

プレイが轟音を響かせて飛びまわる高江集落のヘリパッド建設現場へ行ってみた。

天を突くような板塀と金網に囲まれた工事現場へ兼城さんは登って行く。ぼくもついて行った。工事を守っているのは、東京の練馬区や板橋区からやってきた警察官だった。(大阪の警官は「土人」とか言うので東京にしたようだ)三十歳前後の若者を、金網の近くまで手まねきして、兼城さんは「東京へ帰って下さい。沖縄をいじめるのは、もうやめて下さい」とくり返すのだった。

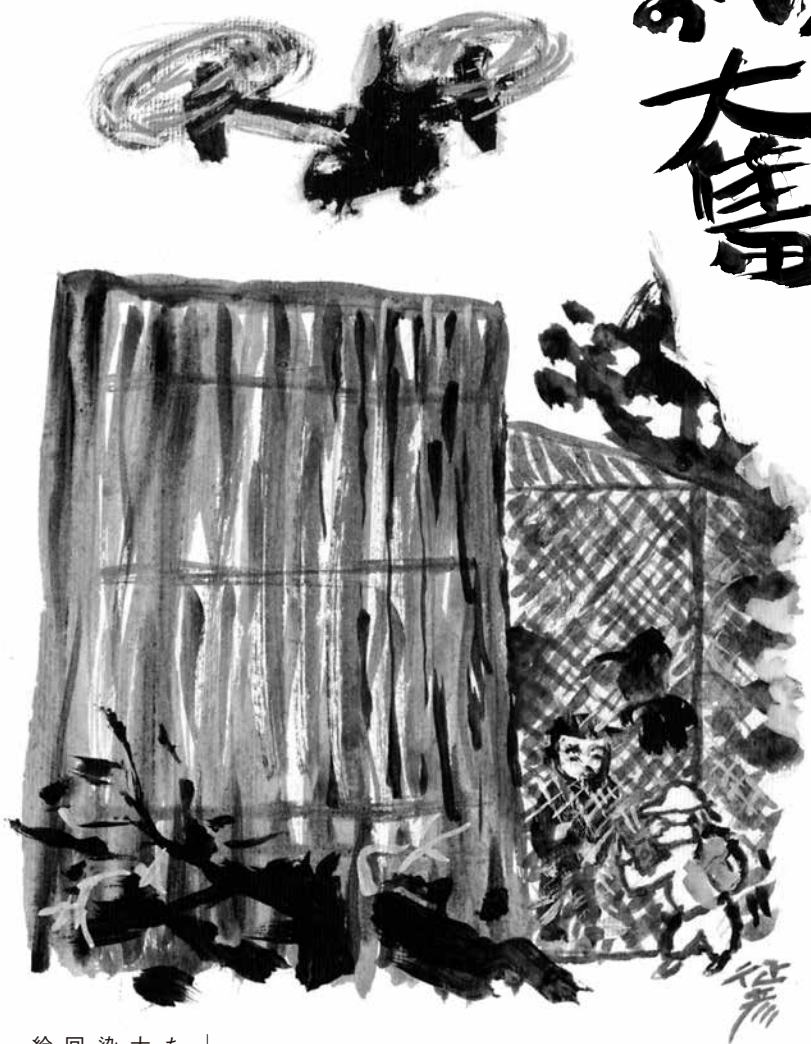
その日、頭上を飛んでいたオスプレイは、近くの名護東海岸へ落ちた。欠陥の疑いのあるオスプレイは、やっぱり落ちた。(二〇一六年十二月十五日)地元の人たちの生活の海を汚し、立ち入り禁止となった。

十二月二十二日は北部訓練場返還祝賀式があった。一九七二年沖縄県の本土復帰以降最大規模の返還と言うが、返還されるのは、米軍も使用できない、北部奥地の断崖絶壁だ。こんなところを返してもらい、人々が生活している場に轟音すさまじいオスプレイのヘリパッドを造ったんだ。怒りの絵本を、早く創りたい。

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じこくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。最新作『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名





# わが家の太郎 ④〇

ネタ

永野 雅子

去年の暮、とうとう「わが家の太郎」が本になって書店に置かれた。自分の書いた物が本屋さんに並ぶなんて、何となく居心地が悪い。こんなこととしていいの？ という心境になる。ただ、この際十一年間の太郎との日々を読み返してみても、確かに太郎は私達の暮らしに刺激を与えてくれていたのだと実感する。

最近の刺激は次のとおり。

暮に東京から帰った息子が今回は二週間ほど居て、太郎の散歩も行ってくれた。

お正月も終わり、やれやれ普段の暮らしに戻ったと思ったら、何となく太郎の様子がおかしい。

夜も家に入って来ず、外の小屋で寝たり、私が仕事から帰って声をかけても無視。特に帰りが遅くなると、いかにも機嫌を損ねたという態度。

こちらもち忙しいから「何なの

よ」と、敢えて機嫌もとらずにいいた。

ある日、太郎の目やにを拭いてやろうと脱脂綿を持って近づいたら、いきなり手首を噛まれた。大したことはないだろうと、カットバンを貼って出勤途中、ふと見ると血が腕に流れている。

病院に行き、飲み薬と塗薬をもらって、お医者様から

「腫れてくるから、なるべく使わないように」と包帯を巻かれて帰ってきた。

言われたとおり、ズキズキと痛むし、腫れてくるし、そうなる「何で私に噛み付いたのよ」と、だんだん腹が立ってきた。

夫亡き後、心通わせてきたと思っただけの私の一人合点だったのかなどと思えてくる。

こちらがそういう心境になると、敏感な太郎はちゃんと察知して食事を残すようになった。なんとなくよそよそしい空気が二人（？）

の間を流れる。

これはどうにかしなければと考えていて、気がついたこと。

太郎にとってご主人様は今でもお父さんであり、その次が息子なのではないか。

その息子が二週間家に帰ってきて、散歩に行ったり遊んでくれたりしたこと、すっかり私の存在は二の次になった。太郎は今でも私より夫や息子を慕っているのかもしれないとだんだんひがみ根性になってくる。

その息子が東京へ帰るとき、太郎のフェンスに何か取り付けて行った。聞けば小型のカメラで、東京から太郎の様子をパソコンで見られるそう。な。「太郎！」と呼びかける声まで聞こえる。

私には用事るとき以外メールもしてこないのに……。

結局傷が治るまで三週間もなかった。

かわら版の原稿締切過ぎても書くことがないとこぼしていた私に嫁曰く、  
「お母さん、書くネタができたね」ですと。

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役



つい、噛みついてしまうたがよ…